

### ロッキード事件の開幕

「スト・権・スト」をようやくのことで乗り切った三木内閣だったが、自民党内の三木首相に対する風当たりはますます強まる一方だった。そこに、その後の政界を十数年にわたって混乱させた重大ニュースがアメリカから飛び込んできた。昭和五十一年二月四日のことである。

米上院外交委員会多国籍企業小委員会（いわゆるチャーチ委員会）の公聴会で、ロッキード社が航空機売り込み工作の資金を日本、オランダ、イタリア、トルコなどに流したことが公表されたのである。さらに同六日には、ロッキード社のコーチャン副社長が同公聴会で「丸紅を通して百万ドルを日本政府高官に贈った」と証言、日本の政界に衝撃を与えた。いわゆる「ロッキード事件」の開幕である。

同日、野党四党は衆議院の予算委員会で、ロッキード社が全日空へのトライスター売り込みのた

め、日本政界に巨額の献金工作を行った事実について追及を開始し、三木首相は「日本の政治の名譽にかけても真相を究明する」と声明した。

これ以後、政局はロッキード事件一色に塗りつぶされる。

二月十六日、衆議院予算委員会でロッキード事件に関し、小佐野賢治・国際興業社主、全日空の若狭得治社長、渡辺尚次副社長を証人喚問。

二月十七日、丸紅の榎山広会長と大久保利春、伊藤宏、松尾泰一郎の三幹部を証人として喚問。

二月二十三日、衆参両院本会議、米国政府と上院に対しロッキード事件に関する資料の提供を要請する決議。

二月二十四日、三木首相がアメリカのフォード大統領宛に事件解明に協力してくれるよう親書を送る。

三月十二日、ロッキード事件についてのアメリカ側の資料提供に関するフォード大統領の返書が到着。政府は米側の限定条件（非公開、捜査、裁判に限つての使用）を受諾。

四月十日、東京地方検察庁が資料を受領。

この一連の流れの中で、自民党内には椎名副総裁を中心的に反三木感情がますます高まっていく。椎名副総裁らのあげた反三木の理由は①党近代化の不実行 ②三木首相が党内の掌握力を失ったこと ③党に相談せず独断専行が目立つこと ④結党以来の危機を乗り切るには新体制で臨むしかないと——といったものだった。

その底流にあったのは三木流の政治に対し保守本流が抱いた異和感、いら立ちだった。しかしそればかりではなく、ロッキード事件に関する処理に当たって「三木首相だけがきれいごとで過ごそ」とするやうかたは許せない」といった感情的な反発があったことはいなめない。

このため、マスコミは椎名副総裁らの「三木おろし」を「ロッキード隠しだ」と批判した。当時、自民党内の反主流派であった大平、田中両派の中からは「身内からナワ付きが出るかもしれないのに、三木首相はロッキード事件解明への姿勢が積極的すぎる」といった声も出ていた。椎名副総裁は三木首相を評して「惻隱の情がない」と断じた。マスコミの批判もあながち的はずれとはいえないかった。

日を追うにしたがって自民党内の反三木感情は急速に高まり、通常国会が終盤を迎えた五月に入ると、椎名副総裁はまず七日に田中元首相、次いで九日に大平蔵相、十日に福田副総理と会談し、三木首相の退陣を求めていくことで合意を得る。反主流派の大平、田中両派に加え、それまで三木首相に全面協力してきた福田派までがはつきりと「反三木に廻った結果、三木首相の立場はきわめて厳しいものとなつた。三木首相を支えるのは三木派と中曾根派だけ。自民党内の勢力図は圧倒的に反三木陣営の方が強力になつたのである。

これ以後十二月二十四日の退陣まで、三木首相は党内の「三木おろし」の大合唱の中で解散、総選挙の手も封じられ、ひたすら耐え続けていくことになる。

### 挙党協との対決

前年（五十年）の十一月、自民党の最高議決機関である総務会のメンバー・党総務に就任していいた森山は、こうした党内の「三木おろし」の動きの中で三木を守るために懸命の努力を重ねる。総務会の場で三木退陣を求める挙党協メンバーの総務たちと激論を闘わすこともしばしばだった。

森山は五十一年五月二十日付の朝日新聞で三木首相退陣を求める大平派の幹部、福永健司と対談し、次のような主張を展開している。

「首相は（総裁）公選規程の構想をまず副総裁に示した。（首相は）非常にフェアにやつていて。三木さん自身は非常な熱意でこの問題を取り組んだ。また（反三木派は）“近代化は三木ではできん”というが、これは積年の問題であり、時間をもつと貸してもらわねばならない」

「率直にいって、最近の動きは不可解だ。首相を変えるには大義名分がいる。国民が分からぬのは困る。永田町周辺のムードと国民世論の落差というようなものがある。これは重要だ。国民世論の動向に沿つた名分がないと選挙を控えていいへん」

「（三木首相は）最善を尽くすだけだ。首相は“色々な動きに左右されず、き然たる態度で進む”といつている。とにかく大義名分がなければ……。面倒だからやめた」というわけにはいかない。全身全霊をつぎ込んでいる首相に敬意を表している」

この森山の言葉に自民党内の大勢がすでに「三木おろし」に固まり、それに必死に耐えている風

情がうかがえる。

森山は同志として三木と行動をともにしてきたが、三木に心酔していたわけでも、黙々と従うタイプの忠臣でもない。が、森山は理不尽な党内の仕打ちはがまんならなかつた。「大義名分のない」（森山）三木首相に対する退陣工作にはいかに自分の立場が不利になろうと、党内で孤立しようと徹底的に対決した。

党内の混乱が続く中で六月十三日、河野洋平、西岡武夫、山口敏夫、田川誠一ら六人の議員が自民党離党を表明、同二十五日に新自由クラブを結成する。新自由クラブ十年間の歴史のスタートである。

梅雨も開けた七月二十七日、東京地方検察庁は前首相・田中角栄を逮捕し、政界の混迷は頂点に達した。田中の容疑は外為法及び外国貿易管理法違反。田中は八月十六日、受託収賄罪と外為法違反で起訴される。

すでに予想されていたことはいえ「前首相逮捕」の衝撃は政界を直撃した。「田中逮捕は三木首相がやらせた」という噂も飛び、この逮捕によって三木首相の立場は好転するとの見通しが流布された。反三木連合が引き続き「三木おろし」を進めれば「ロッキード隠し」の批判がますます高まる見えたからだ。

森山は「こういう

「三木さんていう人はとにかくまじめなのです。田中逮捕についても、田中さんを陥れようなどと

いう気はまったくありませんでしたね」

とはいえた自身は逮捕は三木のさしがねと思いついたふしがある。また、もしそうでないとしても、三木は首相の立場から自分（田中）を守るためになんらかの行動を起こすべきだったと思つていたことは疑いない。

「田中逮捕」は結局、三木首相の立場を有利にはしなかつた。椎名副総裁を中心とする反三木連合は田中逮捕後、一段と三木首相への反発を強め、八月十九日には三木首相の退陣を要求する福田、大平、田中、椎名、船田、水田の六派が挙党体制確立協議会（代表世話人・船田中）を結成するに至る。いわゆる「挙党協」の誕生である。挙党協は直ちに三木首相に退陣を求めるための両院議員総会の開催を執行部に要求し、二十四日に総会を强行して事実上、臨時国会の開会前の三木退陣を盛り込んだ「党議」を決定する。

挙党協対三木・中曾根連合の対立はいよいよ抜き差しならぬ局面に突入した。

三木首相側は挙党協の動きに対し、臨時国会を召集して財政特例法などの重要法案を処理したあと、できれば衆議院の解散、総選挙を行なつて国民の三木内閣に対する支持を取りつけ、局面を開しようと考えた。が、福田副総理ら挙党協は「党内調整優先」——つまり三木首相の退陣が先だと主張して激しく対立した。

ついに三木首相は臨時国会召集に反対する閣僚を罷免して臨時国会の召集、解散を强行することを決意するに至る。



幹事長代理として自民党全国代表者会議に出席。立っているのは内田幹事長。

これを強行すれば、まさに党は分裂である。この破局へ突入する寸前の九月十一日、三木首相が反三木側の代表の保利茂、船田中両名と会談し、臨時国会での解散を否定したことで、事態は一転収拾された。それまでの対立の激しさからみれば、まことにあっけない幕切れだったが、分裂への恐怖が破局への道を思いとどまらせたということだったのだろう。

両陣営の話し合いの結果、臨時国会の召集日を九月十六日とし、その前々日の十四日に党役員人事、内閣改造を行なうことが決定した。結局、内閣、党役員人事は幹事長の人選で難航したあげく、予定より一日遅れて十五日に実現した。

幹事長人事が難航した理由は三木首相が福田派の中で首相ときわめて近い関係にある松野頼三を望んだのに対し、福田、大平らが強く反対したためである。結局、挙党協側が押し切るかたちで幹事長には大平派の内田常雄が就任する。三木首相は党側のかなめを挙党協に奪われたわけだ。

最悪の事態（党分裂）は一応避けられたものの、挙党協の「三木おろし」工作は依然として続いた。解散権をしばられ、人事面でも抑え込まれた三木首相の立場はますます厳しいものとなっていく。

九月十五日の党役員人事、内閣改造で森山は幹事長代理のポストに就く。幹事長を挙党協側に奪われた三木首相にとってこのポストはきわめて重要であり、いってみれば森山は三木の頼みの綱だった。

森山の仕事は決して楽なものではなかった。党内の大半が挙党協の名のもとに「三木おろし」の

大合唱を続ける中、微妙な党内調整に神経をすり減らす毎日。孤軍奮闘の森山にとって唯一の救いは「上司」の内田常雄が「天衣無縫の好人物」（森山）だったことである。

### 三木退陣

三木内閣は結局、任期満了前の解散、総選挙を狙つたものの果たせず、十二月五日に任期満了選挙に突入して惨敗、その責任をとつて退陣した。森山の幹事長代理在任期間はわずか三ヶ月。しかしこの三ヶ月は森山にとって長く苦しいものだった。ことに森山が苦労したのは選挙資金である。

「いまにして記憶に残るのは、いざ任期満了選挙に追い込まれてみて党に金がなかつたことですね。選挙で金がいるとなつて金庫のドアを開けたら、なんと金はまったくなくて、二百億円近い借金の証書が出てきたのですよ。三木内閣の前が田中内

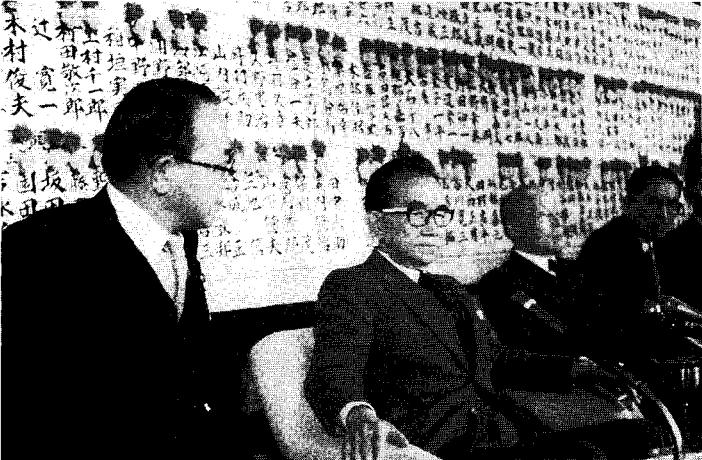
閣でしたから、おそらくムチャクチャに金を使ったのでしょうか。銀行も金を貸してくれませんし……とにかくへんでしたね。現実に金がない以上、少ない金をどう配分するかに頭を痛めましたよ。このときの選挙は党本部の事務的経費なども入れて三十七億円ぐらいでやつたはずです。普段の選挙に比べたら非常に少ない。しかしとにかく金が使えないのですから。あのとき河本敏夫君が、だいぶ資金面で貢献したと思います」

選挙資金がほとんどない。そのうえ党内は挙党協と三木・中曾根連合に真っ二つ。その中で各派閥がそれぞれ選挙対策本部を設置して独自の運動を展開するという完全な分裂選挙、派閥選挙である。自民党総裁でもある三木首相が統率力を發揮する余地がないわけだから、公認調整などもちろんできない。加えてロッキード事件にからんでの世論の反自民感情の高まりとくれば、森山らがいくら頑張っても結果は明らかだ。

案の定、自民党は惨敗した。負けるべくして負けたというべきだろう。改選前の二百六十五議席から二百四十九議席へ転落。追加公認の八人を加えてようやく過半数を一議席だけ越える二百五十七議席を確保するにとどまった。

森山自身はこの選挙で八万五千五十一票を獲得、二位当選を果たしたが、楽な選挙ではなかった。「たいへんでしたよ。昼間は党本部で幹事長代理としての仕事をやり、夜は電車で選挙区へもどつて演説会場を走り回り、深夜、自動車で東京へもどるという毎日でした」

総選挙で敗北した三木首相は十二月七日、内田幹事長をはじめ党三役に対し、敗北の責任をとつ



幹事長代理として総選挙にのぞんだ。

て退陣する意向を明らかにした。退陣はそれから十日後の十七日だったが、この間、三木は神奈川県真鶴の別邸にこもり、自民党への提言（党改革構想）を練った。自分のクビと引き換えに自ら理想とする党改革を党にのませようとの悲壮な決意だった。

一方、三木が退陣を十日間も遅らせたのは、この間に党内の空気が変わることを期待していたとの見方もある。党内は「責任をとつて辞めるべきだ」とする意見と「敗北は三木の責任ではなく、挙党協やロッキード事件を起こした田中角栄らのせいだ」といった主張が伯仲、揺れ動いていた。三木は、「辞めるな」という世論が高まるのを待つために時間をかせいでいた可能性があるが、党内は三木の期待に反して、時とともに三木退陣に固まつていった。

この間、森山ら三木派の幹部たちも退陣問題に

ついて、連日議論をたたかわせていた。

当時の状況について森山はこう語った。

「僕はあの時、はつきりいってやはり辞めた方がいいと思いました。あれだけ党内がゴタついた以上、そろそろ引けどきだと感じました。三木さんとも何度も話し合った結果、退陣と引き換えに党改革をのませようということになつたのです。三木さんが発表した提言には僕の意見も入つていました。」

退陣にあたつて三木が出した提言は大要、次のようなものである。

自民党は『進歩的国民党』を標榜して発足した原点から再出發すべきである。自民党は国民の要望と時代の要請に応えつつ、常に「継続の中の改革」を求めて前進しなくてはならない。私は在任中、そのために努力したつもりであるが、力及ばなかつたことを反省している。

しかし、党内のいわゆる「保守本流」といつた意識が「長老政治」と結びついて、党的動脈硬化をきたし、党を国民から遊離させている。このさい、こうした党体質の改善なしに党的再生はありません」と信ずる。

自民党が金権体質と派閥抗争を一掃しない限り、国民の信頼を回復することは不可能である。

私は在任中に総裁公選制度の改革をはかつたが、残念ながら実現していない。この党再生の支柱である公選制度の改革は是非とも実現を期さなければならない。

自民党は結党以来の危機に直面している。党员の一人ひとりが危機克服に真剣に取り組まなければなりません。

れば党の再生は期し難い。

この三木の提言はもつともな事ばかりである。かつて福田赳夫は党風刷新連盟を作つて同様の理想を説いた。その福田が三木に長老支配との非難を浴びる。その三木と福田が組んで今度は中曾根おろし（二階堂擁立工作）を画策する。これを繰り返している限り自民党の刷新はないのだが、派閥が存続する限りこの通弊はなくなるまい。

三木内閣は田中内閣の金権政治に対するアンチテーゼとして誕生した。しかし党的刷新を標榜しながら、なすところなく刷新と引き換えに自らが退陣するという皮肉な運命をたどつた。

さて三木内閣の約二年間の実績はといえば、せいぜい政治資金規制法、公職選挙法の改正といったところだ。いずれも政治の浄化を眼目にしたものだが、現実の効果はほとんどなかつた。あまりにも少ない実績は三木流政治の限界を物語る。

政治改革はダイナミックな発想が必要であり、それを実現する力も不可欠だ。三木の発想はマスコミ受けはしたが、きれいごとに過ぎて自民党員の心を動かすことはできなかつた。かつそれを実現する力をも欠いた。このため三木はマスコミや野党を味方につけようとしたが、これが逆に党内の反発を強めた。政党政治の基本は政策の中心をその党的本流に置かなければならない。保守傍流といわれた中曾根政治が評価を得たのは、その政策が保守本流のものであるからだろう。

森山たち同志が長い間夢み、ついに実現した三木内閣は七百四十七日間にして幕を閉じた。